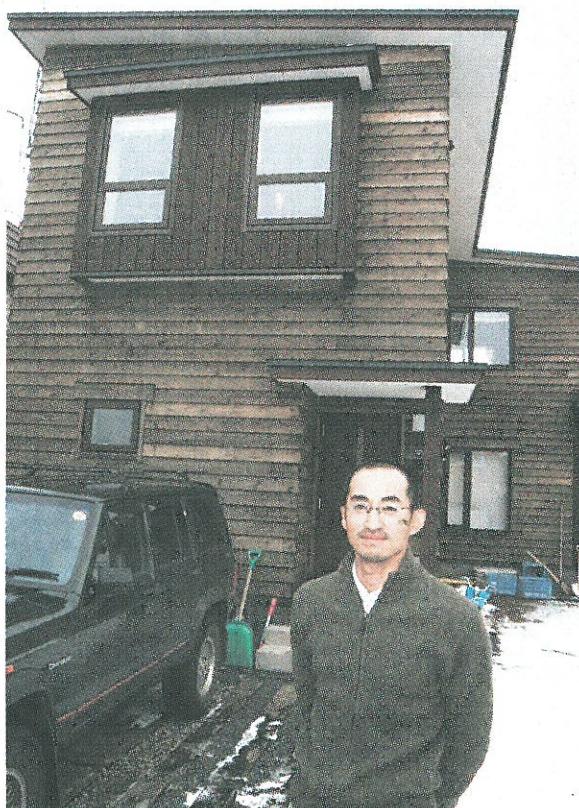


住まいの かたち

ストーブと、自然素材と道産材にこだわった自然派健康住宅だ。

高田さんは妻の弘子さん（三二）と長女（五〇）、長男（四七）の四人家族。農業関係の雑誌編集者の高田さんは、取材を通じて無農薬、有機農業、地産地消といった地政問題に優しいエコロジー的な考え方と共に鳴った。食べ物や生活用品にも気を使ってきた。「嫌な新築臭もせず、毎日の生活が心地いい」。

田洋介さん(四宅も、天然の素材をふんだんに使つて、一昨年九月に新築した木造二階建て(延べ約十五平方㍍)住宅。それまで約十年住んだマンションを手放し、住み替えた。



と「エビ」「ろ」色あせて見える板張りの外壁。懐かしさが漂う高田さん宅

自然素材 エコ住宅

思わせるトドマツの板張りになつてゐる。二階の子供部屋と寝室は、ホタテしつくいの塗り壁。4LDKの家の隨所に、木の温かみがあふれてゐる。

娘一人(中一、小五)のアトピー性皮膚炎が、自然志向になつたきっかけ。少しでもアトピーにいいものを、と食べ物や生活環境を変えていくうちに、「後は家しか變えるものは残つていなかつた」。因果関係は不明だが、「アトピーも少し良くなってきた」と夫婦は

する調湿性や抗菌性に優っている。傷つきやすく、ソテナンスに手がかかりが、手をかけるほどに味いが出てくる。「自然素材は『生きている』ということ。それを大事にしたい」（西條さん）

マツ材を使った増田さんのベランダ。洗濯物を干す際、足に松やにがついてしまう。幸子さんはそこにある。幸子さんはその時「つい喜んでしまう」という。家が「生きている」ことを実感する瞬間だ。

ふんだんに木材を使った増田さん宅のリビング。やわらかい床板に敷物は不要だすね」。増田さんと妻の保育士、幸子さん(四三)は、満足そうに口をそろえる。

一階のリビングダイニングキッチン(十八畳)の床板は、道北産トドマツと道南ブナ。玄関入り口の引き戸や食器棚もオリジナルのエコ製品だ。リビング横の和室の天井は、古い民家を

二軒の家を手がけた札幌市内の建築工房「西條インテリアデザイン」の西條正幸さんは、「地球環境や人間に負担のかかるようなモノはできるだけ作らず、使わない」というのが、エコロジーの考え方。住宅でも、天然素材や自然塗料を使つた安全で健康的な家造りが必要です」と強調する。エコ住宅は建材や工法により価値

感じている

さ ず な を 求 め て